

総会報告要旨

ロシア・フォルマリズムの「異化」概念再検討

石 川 達 夫

ロシア・フォルマリズムの「異化」概念の基本的な問題点は、シクロフスキーが「手法としての芸術」の中で、この概念を、曖昧に二重の意味で用いたことである。一つは、「生の感覚を取り戻し、事物を感じとり、石を石らしくするため」の手法という非常に広い意味、もう一つは、文字通り「事物を奇妙にし、形式を難解にし、知覚をより困難にし、より長引かせる」手法という狭い意味である。事物を生き生きと知覚させるためには必ずしもそれを奇妙にして知覚を困難にし長引かせる必要はないのであり（例えば、複雑なものを一気に鮮明に知覚させる比喩や象徴などを参照）、まずここに、「異化」概念の基本的問題点がある。前者の広い意味には「活性化」という用語を用い、「異化」は後者の狭い意味に限定して使用した方が良い。

「活性化」とは、事物に注意を引き付け、それを生き生きと知覚させることであり、これは美的機能の最も基本的な作用である。「活性化」は、「自動化」のみならず、美的機能と实际的機能との潜在的対立関係という点からも理解されねばならない。实际的機能には、機能を担う事物をなるべく節約して機能だけを残そうとする「エコノミーの法則」がある。これに対して、美的機能は、美的機能を担う事物にできるだけ注意を引き付け、生き生きと知覚させようとする。美的機能の「活性化」の作用は、

このような实际的機能の圧力に対抗し、そこから人間を解放して、事物をできる限り生き生きと十全に知覚させ、人間と世界との繋がりを回復させる。

見慣れたものをわざと奇妙に見せる「異化」の手法の本質は、事物を慣習的な世界認識の構造の外に出してしまう、構造離脱である。そして、その構造離脱は、非常にしばしば構造内視点から構造外視点への視点の転換によって達成される。

ロシア・フォルマリズムにおいて、「異化」には2つの場合が想定されていた。第1は、日常的事実を「異化」して文学的事実とする場合であり、第2は、自動化した文学的事実を「異化」して新しい文学的事実とする場合である。しかし、両方の場合とも、「異化」よりも「活性化」の方が本質的要件であることは明かである。

第2の場合については、作者が新機軸を含んだ作品を完成させた段階では、新機軸は、作者の意識における芸術的規範の構造、即ち芸術的コードの中に組み込まれているので、作者にとって新機軸は奇妙なものではない。一方、読者は、新機軸を含んだ新しい作品に接する時、まず自分のコードに従ってすべてを理解していこうとするが、コードに登録されていない新機軸の部分に出会うと、それを芸術的規範構造の外にあるもの、即ち従来の構造から「離脱」している奇妙なものと感じる。ここに「異化」

が生じる。しかしながら、読者はすぐに、その構造外の新機軸の部分をどうにかして構造内に取り込み、作品全体を統一的に理解しようとして、自分の規範構造を修正・変更し、試行錯誤を重ねながら作者のコードに近づいていく。そして、新機軸をコード登録することに成功すると美的体験が成立し、その新機軸はもはや奇妙なものとは感じられなくなる。うまくコード登録できず、美的体験が成立しない場合にのみ、その新機軸は奇妙なものとして残るのである。このように、ここでは、「異化」は「活性化」に付随して生じる二次的現象にすぎない。

ところで、自動化に対抗して事物の知覚を活性化させるために用いられる手法には、様々なものがある。二つ以上のものを比較しながら通常価値の低いと思われているものを高め、逆に価値の高いとされているものを貶めるという「逆説的対照法」も、その一つである。「逆説的対照法」は、「構

造」の中で上に位置しているものを下に貶め、下に位置しているものを上に持ち上げるという価値論的転換の手法であり、これは上と下、内と外、表と裏を入れ換えるという構造転倒の1形態である。「逆説的対照法」は「異化」と非常に親縁性の強い手法であり、両者はしばしば組み合わせて用いられる（モンテスキュー、スウィフト、ヴォルテール、トルストイなどの作品を参照）。

「異化」も「逆説的対照法」も、様々な「活性化」の手段のうちの1つにすぎない。更に、構造内の要素の位置をずらしたり、諸要素を組替えたり、構造に新しい要素を導入したりする構造変更も、「異化」に近い活性化の手段である。そして構造転倒と構造離脱と構造変更に関わる諸手法は、因習化した世界認識を改新する、即ち、世界に対する人間の態度を改新することに大きく貢献するという点で、特に重要なものである。

チャーホフの戯曲におけるコミュニケーションの問題

木 村 敦 夫

チャーホフが生存していた時代から今日にいたるまで、多くの批評家が彼のことをコミュニケーションの不在を描いた作家だと考えてきた。そして、この事については、小説の面からも、また戯曲の面からも多くの批評家が指摘している。実際に、チャーホフの後期の小説・戯曲においては、登場人物の間の会話の中で、コミュニケーションがうまく成り立っていない場面が目につく。会話の相手に誤解された台詞、時・場

所にふさわしくない台詞、誰に向けられたのかわからず、皆に無視されてしまい宙に浮いたままになってしまった台詞が数多く見うけられる。きちんと成り立ったかもしれないコミュニケーションが、結局は実現しない。これらの台詞は、登場人物間のコミュニケーションを成り立たせるという、それ本来の役割を果たすことなく、言い終えられ放置されたままになってしまう。

しかし、勿論のことながら、チャーホフ